

寒星

松岡隆子

冬一日籠りて師の句師の言葉
師のこゑの降りくるごとき寒の晴
石露咲いて八つ手が咲いて師の在さず
ゆくほどに独りごころや雪ばんば
綿虫のふはりふはりと遠ざかる

その先の道昏れてをり雪ばんば
おのが影踏みまどひては枯深し
寒星を見上げすぎたる身の痛み
気づかひの言葉短き霜の夜
葉牡丹の渦に迷ひのなかりせば
日向ほこ此の世さみしと思ふ日の
遥かなるもの一つに炭火の香